



初めての公開研究授業を振り返る ～教員研修委員として、授業者として～

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 奥田 昌之

はじめに

広島なぎさ中学校・高等学校では、「21世紀型高学力の養成」「国際性の涵養」「創造力の錬磨」「人間力の育成」の4つの教育目標のもと、次世代を見据えた教育に取り組んできました。現在は、国が進めている高大接続改革及び新学習指導要領の方向性を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」を育む授業の創造を目指して、授業改善を進めているところです。平成29年度はその取組みの一環として、「公開研究授業」を実施することとなりました。

公開研究授業の実施までには、多くの教員の時間と労力がかけられていることはいうまでもありませんが、ここでは実施母体である教育研修委員会のメンバーとして、また授業者として関わった私の視点で、実施に至るまでのプロセスや、実際の公開研究授業の様子を紹介させていただきます。

「公開」への道のり

本校では従来から「教育研究会」として教員の勉強会を実施していましたが、あくまで校内の取組みにとどまっていた。それを「公開」して実施することについては、当然ながら様々な葛藤がありました。すでに年間行事が組まれている中、準備に多大な時間を要するであろう新たな行事をどこで実施するのか、また、私立学校ではあまり例がない試みであるため、本当に実施できるのか、実施したとしても見に来てもらえるのかなど、様々な危惧も出されました。しかし、公開と非公開で

は、緊張感や学びの深さに大きな違いがあり、外部の視点からアドバイスを得ることは、授業者及び教科全体が鍛えられ、授業改善に向けての動きが促進されること、そしてこれまでの「教育研究会」を見ても、取組みは年々進化しており、教員一人ひとりの日頃の授業研究の熱心さや授業の実際からしても、公開することに何ら支障はないこと、さらに公立での経験が豊富な本校の永尾副校長が運営を支えてくださることを踏まえ、まずはやってみようということになりました。こうして、教員研修委員会を中心として、全校を挙げた取組みがスタートしたのです。

教員研修委員会

教員研修委員会は、校長、副校長、中高両教頭、教務部長、次世代教育推進部長、教育開発部長、5教科主任で組織されています。私は数学科主任として委員会に所属することとなりました。

最初の仕事は授業改善に関わる研究テーマを決めることでした。そのため、まず現在本校において、どのような授業が求められているのかを明確にするワークショップを行いました。具体的には、研修委員一人ひとりがテーマとしてふさわしいと考える授業や学びを付箋に書き、縦軸に「必要性の多寡」、横軸に「一般的・個別的の別」をとった座標軸チャートに貼って整理していきま

した。議論の過程で、主体的な学びが成立している授業とは、生徒の自発的な質問が生まれる授業ではないかという

仮説が提出され、最終的に「主体的な学び・深い学びを育む授業～生徒の疑問をどう引き出すか～」を研究テーマとして決定しました。



こうして、公開研究授業の実施、テーマの決定に直接参加することを通して、改めて自分自身の授業の在り方を大きく変えていかなければならないとの思いを強くしました。

授業者になる

初めに決めなければならないのが、教科内における公開研究授業の意義の共有と授業者の決定でした。私は数学科の科会で、公開研究授業は授業改善の一環であり、これまでの取組みとの違いは、公開するかどうかだけであること、最も重要なのは「外部に見せる」ということではなく、一つの研究テーマのもと「全員で授業改善に取り組む」ことであることを説明しました。そして数学科の授業は、誰の取組みを公開しても恥ずかしくないものであり、そうなるよう数学科全体で授業づくりをしていくことを確認しました。

授業者については、公開研究授業は次年度以降も継続的に実施されることを踏まえ輪番表を作りました。その一番手が私に決まったため、以降、私は企画運営とともに、授業者としても関わることとなりました。

公開研究授業まで

外部の方に授業を公開することは、本校の数学科としての取組みを見てもらうことであり、改めて数学科が育てる生徒像を意識することとなりました。

具体的には、数学科が掲げる哲学「もがけ、残せ、目指すは美しく」のもと、どんな難解な問題を目の前にしても思考・判断をやめないもがける生徒、その過程を整理・説明するために残せる生徒、様々な考え方を受入れ、よりよい解答を目指す生徒となります。それはカリキュラム・マネジメントに基づく授業づくりの大切さを一層意識することとなりました。

夏休み明けに、教科会にて授業の大まかな流れや取上げる課題をいくつか提示し、意見交換を行いました。「その課題では手がすぐに止まってしまうのではないか」「しっかり考えさせるには時間的に難しいのではないか」「生徒のやりとりの中から疑問が生まれ、さらにやりとりがなされるのが理想的な授業展開ではないか」など、公開研究授業に向けて、貴重な意見や授業づくりのヒントをもらうことができたと思います。

教科会でもらった意見を踏まえ、授業の指導案作りを始めました。指導案の形式も一新されたので、作成にあ



り初めは多くのとまどいがありました。けれども、教材観、生徒観、指導観、単元の評価規準など、今まで文面にしてこなかった部分について深く考えることにより、改めて今までの自分自身の授業を見つめ直す機会となりました。

作成された指導案は、指導助言の

岡谷清先生(広島工業大学教育学習支援センター)に送り、それを基にメールで直接アドバイスをいただきました。指導案の細かな書き方のみならず、課題の条件設定を少し変えることで、生徒の学びがより深くなること、教材研究の面白さ・奥深さを教えていただきました。指導案が完成した後も、公開研究授業の当日まで教材研究をし続けました。一つの授業をつくるのにここまで時間をかけたのは初めての経験でした。

公開研究授業当日

当日は、比較的手を動かしやすく、別解が多く考えられる課題を、始めは

個人で、後にグループで考え、理解を深めていく授業を目指しました。

しかし、実際は、生徒がなかなか一つの視点から抜け出せず、グループでも別解まで至れず、時間が差し迫る中、半ば強引に教員が説明を行う不本意な授業となりました。あれほど授

業づくりに時間をかけ、事前に異なる課題で同様の授業を複数回行い、それなりに手応えを感じていたにも拘わらず、思うようにいかなかったことで、まさに授業は「生き物」だと実感しました。

その後の研究協議会は、ワークショップ形式で行われ、グルーピングした意見をもとに、テーマを実現できる授業の在り方について各グループで討議を行いました。「生徒の言葉で授業を展開する」「予

め別解の視点を与えてグループ活動を行う」などの貴重な意見のほかに、「生徒たちが諦めずにしっかり考えていた」「授業が終わった後も何人か質問に来ていた、それこそ疑問が引き出されたといえる」という言葉もいただき、今後の励みになりました。

おわりに

現在、教員研修委員会を中心に公開研究授業の振り返りや課題が検討されています。このPDCAサイクルにより、なぎさの「公開研究授業」はまだまだ進化をしていきます。